

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 水野善文 印

学位申請者：田中 あき（たなか あき）

論文名：仏領インドシナにおける植民地文学 —ベトナム語作家カイ・フン（自力文団）の後期テクストを中心に—

【審査の経過と結論】

2023年3月3日、田中あき氏から博士学位請求論文「仏領インドシナにおける植民地文学—ベトナム語作家カイ・フン（自力文団）の後期テクストを中心に—」が提出されたことを受け、同年3月8日開催の大学院総合国際学研究所教授会にて審査委員会設置が承認され、審査が開始された。審査委員会は、水野善文（本学大学院総合国際学研究所教授）を主査とし、沼野恭子（本学大学院総合国際学研究所教授、現本学名誉教授）、久野量一（本学大学院総合国際学研究所教授）、野平宗弘（本学大学院総合国際学研究所准教授）、川口健一（本学名誉教授）の計5名の委員から構成された。

各審査委員による論文の審査および2023年5月7日にオンラインで実施された最終試験の結果、審査委員会は全員一致で同様に博士（学術）の学位を授与することが適切であるという結論に至った。

【論文の概要】

本論文では、フランス植民地時代のベトナム・ハノイにおいて1930年代から1940年代前半に活動した文学グループ‘自力文団’の主要なメンバーであった文学者カイ・フン（1879-1947、本名：チャン・カイン・ズー）の、とりわけ政治との関わりをもつようになってからの後期作品に注目し、それらの歴史的・社会的背景を明らかにするベトナム語文献資料を丹念に調査したのち、的確な作品分析を施して、時代に翻弄された彼の文学を生き様そのものを描き出すように紹介し、新たな評価を与えている。

序論において、まず、仏領インドシナという複雑な状況を呈する植民地時代に登場した作家たちのなかから、ベトナム語で著作したが故にカイ・フンに着目し、植民地文学としての性格を帯びているが故に後期作品を中心に扱うという研究対象選択の理由を述べ、本研究を植民地文学研究およびベトナム地域研

究のなかに位置づけている。次に先行研究について概説されるが、ベトナム国内において「反動かつ頹廢の傾向」と一般に評された後期作品については、これまで殆ど学術的研究の対象とされたことがなく、本論考が初の本格的な研究の試みであるという。

全体は二部構成となっている。第一部（第一章～第三章）で、カイ・フンが登場した社会、および今日に至るまでの様々な立場からの彼の文学に対する評価、さらには彼の生涯と社会貢献を纏め、第二部（第四章～第八章）での作品分析のための十全な準備作業となっている。

第一章では、20世紀初頭の抗仏運動が頓挫し閉塞感漂うなか、支配者フランスによって施された近代的教育、すなわち漢籍古典を中心とする「旧学」に代わる「新学」を受け、西洋文明に価値を認め羨望する世代が現れ、その象徴ともいえる、七人のベトナム青年エリートによって結成された文学グループ「自力文団」（‘自作の芸術で自力で生きる’という意）の活動が紹介される。彼らが刊行した文芸誌『風化』『今日』に彼らの活動の意図を見出す一方、少年少女向け「紅本シリーズ」のなかに、儒教思想・仏教思想に基づく伝統的価値観を重要視する姿勢も読み取っている。

第二章では、1930年代から現代にいたるまでのカイ・フン文学がどのように評価されてきたかを克明に調査している。フランス植民地から1945年9月の独立も束の間、南北分断、そして1976年社会主義共和国としての統一、更に1986年から開始されるドイモイ（刷新）期ベトナムの複雑な社会情勢・歴史のなか、様々な立場からなされた評価は、その立場を十分に踏まえて初めて妥当性を帯びるものであり、筆者自身が立つべきオープンな立場を自ら確認する意味でも、作品分析に取りかかる前の段階で調べ上げたことは重要であった。結果、自力文団所属の小説家カイ・フンの作品はロマン主義、ブルジョアジー、頹廢、反動との一般評が国政とリンクした偏向極まりないものであったことを確認している。

性格形成、思想形成の過程を具に観察すべく、カイ・フンの生涯を調べ上げた第三章では、ローマ字表記のベトナム語「^{クオックグー}国語」やベトナム史のみならず中国、フランスの言語、思想も修学したことによって言語感覚が研ぎすまされ、「^{クオックグー}国語」を洗練させたこと、仏教信者ゆえに不殺生、非暴力・非戦の確固たる理念を持ちつつも、政治的にはいずれにも偏向することのない姿勢を貫き通したことを指摘している。にも拘らずベトミンに拉致・殺害される最期が、時代に翻弄され続けた文学者人生を象徴する帰結であったことが示唆される。

作品分析からなる第二部の最初、第四章では、政治活動に足を踏み入れ始めた1938-1939年に文芸誌『今日』（第133～140号）に連載された短編小説『ハ

イン』（ハインとは主人公の名で「幸せ」を意味する）を、自力文団のメンバーの親戚にあたるグエン・ホンが同時期『今日』に連載し、自伝的小説と高く評されている『幼き日々』と比較しながら分析していく。ローマ字表記のベトナム語「^{クオックグー}国語」を駆使して思考と感情とを的確に表現し、「^{クオックグー}国語」を一層洗練せしめたことに貢献した彼らは、それぞれの作品のなかで自己告白をしているのであり、前者がロマン主義文学、後者がリアリズム文学とされるレッテルは剥がされるべきとした。そしてカイ・フンの自己告白のなかに、ナショナル・アイデンティティが幻想にすぎないこと、この夢から覚醒すべきとの主張を読み取っている。

第五章では、カイ・フン最後の長編小説『清徳』（1943）に、政治犯の嫌疑で投獄された期間を含む（あるいは、先立つ）時期に執筆された作品ゆえに、検閲の眼を潜り抜けるためもあって、様々な仕掛けが施されていたことを解き明かしている。デカダンス要素が散りばめられ、いかなる主義主張も、訴え・呻き声も窺われない様相のなかに、西洋文化（具体的にはドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』）から学んだであろうレトリックを用い、ベトナム伝統文化を共有する者たちにしか理解できない符丁を駆使して、ベトナムを巡る各国の動向、未来予想図を描いていたことを読み解いている。

自力文団による少年少女向け「紅本シリーズ」の一冊として1944年に刊行された戯曲作品『道士』を扱う第六章では、まず同書が、日仏共同支配期の保護観察下という出版規制があった時期ゆえに童話という隠れ蓑に包まれたものであったことを指摘する。古代インドの「一角仙人」説話を翻案とする、この作品の寓意を解釈して、個人崇拜および全体主義の危険性に警鐘を鳴らすカイ・フンのメッセージと解している。

第七章では、とりわけ政情不安で混沌とした1945-1946年、つまり八月革命、独立宣言につづく実質的脱植民地を目指した対仏戦争勃発までの間、新聞各紙に掲載されたカイ・フンの短編作品（「外来の頭」「フランス人、家に押し入る」「省行政長官」）やコラム記事を分析対象としている。カイ・フンは、植民地主義および植民者を悪のなかに一括りすることなく、一人の人間としての植民者を、自ら見聞したことをもとにリアルに描き出すことで、他者の痛みを想像する精神を読者に呼び覚まさせているとともに、敵・味方という単純な二項対立ではない複雑な支配構造を暗示していることを看取している。併せて、熱狂的ナショナリズムという趨勢のなか、これをカイ・フンは冷めた眼でみていることを確認している。

第八章では、ベトナム国民党機関誌『正義』第9、10号（1946年7月29日～8月5日）に掲載された戯曲「月光の下で」を分析する際、その舞台が史実であ

ったことを、ベトナム国外の諸資料を調査し確認している。国民軍と共産党側である衛國軍にそれぞれ属する二人の青年兵士の人間愛がテーマである、この戯曲作品は、インドシナ戦争（対仏戦争）勃発直前に、ベトナム北部で同国民同士の内戦という史実を踏まえているとし、カイ・フンがジャーナリストに成り代わったかのように、これを報告・記録する義務感のもと創作したと見ている。カイ・フン自身が属する国民党による検閲のもと墨が塗られた登場人物の台詞の部分は、彼自身の非戦のメッセージが籠められていたのではないかと推測している。こうした言論活動を、カイ・フンが思想的・政治的偏向性を有せず、あらゆる団体・陣営に対して等しく抱いた批判的精神の発揮だとして、そこに彼が政治活動家ではなく、根っからの文学者であった証しがあると看做している。

終章に相当する「結論」において、これまでの記述を概括したあと、カイ・フンが登場した時代、環境、受けた教育、生涯を再確認しながら、後期文学作品の特徴を指摘している。1) 中国文化・フランス文化・ベトナム文化とともに、それぞれの言語に囲まれた異種混淆の空間のなかに生きたカイ・フンがなした思考、言論は、時に矛盾を抱えつつも、モノローグ（一義的）ではあり得ず、ダイアローグ（多義的）となり、作品の多層性・重層性に反映している。2) 現代語を用いる被支配者の作家が、目紛しく政体が替わる複雑な時代に、自分の作品を如何に合法的に発表し後世に残して行くかを模索しながら、柔軟な、いずれに対しても偏向することのない姿勢を保つ必要性に迫られていたことが窺われる。

極めて才情豊かな人間であったカイ・フンと彼の文学作品は、時代が生み、時代によって抹殺された、という表現で、植民地下のベトナムという特殊な歴史事情のなかで、懸命に発信し続けた文学者とその人の作品の文化的、歴史的価値の大なることを指摘して結論としている。

【最終試験の概要】

2023年5月7日（日）10:00～12:30、オンラインにて最終試験公開審査を実施した。まず、学位申請者・田中あき氏より、論文の概要を画面共有パワーポイント投影レジュメにもとづきながら、30分程のプレゼンテーションをしてもらった。それに続いて、各審査委員との質疑応答がおこなわれた。

高く評価できるとして挙げられたのは次の諸点である。

○ベトナム近代文学形成に大きな功績を残したカイ・フンの後期作品のなかでも、従来あまり研究対象として取り上げられることがなかった諸作品を俎上にあげ、カイ・フンの新たな側面を見出して、才能豊かな文学者像を説得力をも

って描き出している。

○散逸していた関連一次資料（ほとんどがベトナム語文献）の収集・調査に絶大な労力をかけたことが窺われ、それが功を奏して、旧北ベトナムおよび統一後のベトナムで政治的観点からのみなされていた批判に再検討を加え、カイ・フンの後期作品を柔軟かつ多面的に分析・解釈し、これを再評価することを可能にした。

○第三世界における知識人、とりわけ独立期の知識人の果たした文化的、歴史的役割の大きさが提示され、第三世界の知識人研究の事例として貴重である。とりわけ新古・東西様々な文化が接触する、いわゆる「周縁地域」に特有の事例研究としても、地域研究分野に裨益するものである。

全般的には以上のような高評価がくだされたが、部分的な問題および文章表現に関する改善点に併せて今後の研究に期待する点など、次のような指摘がなされた。

○「後期作品には、本論文で扱ったもの以外にも、興味深い作品がなお多く残っている」と田中氏自身も認めているとおり、速筆であったカイ・フンの全作品の読解をとおして、彼の文学者像の更なる深みを探り出すとともに、文学グループ「自力文団」における彼の立ち位置、成し遂げた役割を一層鮮明にし、それをどう評価できるか、研究を進めてほしい。

○作品分析にあたり、文学理論および思想的テーゼを帰納的に用いて説得力をもたせようとする意図は分かるが、ともすると演繹的かつ恣意的に用いてしまっているように読み取れる表現が惜しまれる。つまり、予め設定した理論の枠に嵌めるようにテキストを読解したように受け取れてしまう箇所が散見されたが、そのような文章表現を改めて、客観的視点からテキストの真義を読み解いた研究作業工程を踏まえ、理論を参照しているのが分かるように述べるべきだ。

○タイトルに「植民地文学」とあるのに、芸術形式としての「文学」とは何かについての議論がないことが惜しまれる。今後は、植民地における「美意識」「美」の問題についても検討してもらいたい。

これらの指摘のそれぞれに対して、田中氏からは、真摯に受け止め今後の研究に活かしていきたいという意志が表明された。

以上、博士論文の審査および最終試験公開審査の結果、審査委員会は全員一致で、本論文が博士論文の水準を十分に満たすものと判断し、田中あき氏に博士（学術）の学位を授与することが相応しいとの結論に達した。